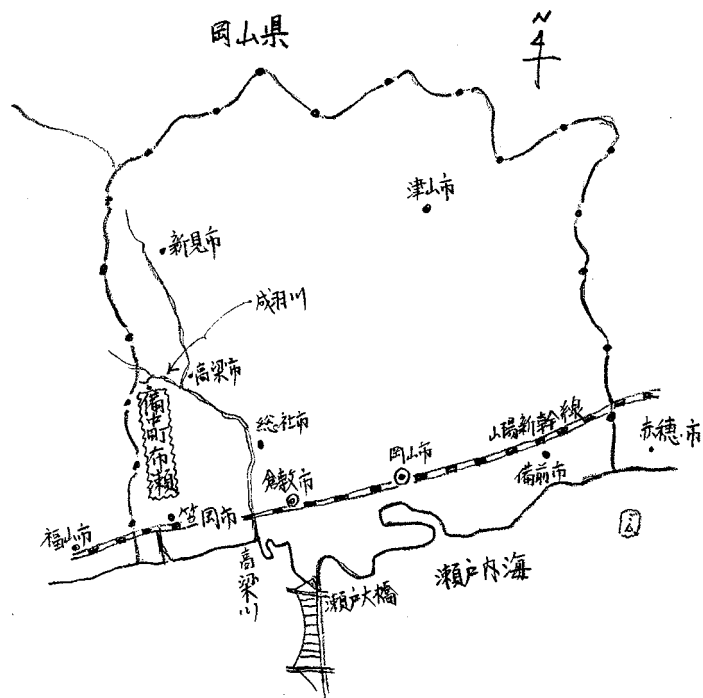


三、「ごんべえ」ことはじめ

「みならい百姓ごんべえ」と自称することにした。その内、「みならい」をとって「百姓ごんべえ」に昇格するつもりである。

もともと「見習い」などと云うつもりはなかったのだが、友人からクレームがついたのだ。六十二歳にもなって、初めて農業をする人間が、百姓を名乗ることなどおこがましいと云うのである。向こう意気の強い小生も、これには参った。不承不承「みならい」を頭に着けることを承知した。妻もそうだと云うので仕方がない。

農業を始めた場所は、岡山県中西部に位置する山間部の谷間で、他でやれと言われても困る。ここで生まれ育ち、高等学校を卒業するま



で暮らし、今も九十歳と八十五歳を越えた両親が住んでいて、家屋敷、田畑、山林がずうっとずうっと昔から、その昔から存在しているのである。ひよっとして、神代か縄文の昔からかもしれない。

岡山県には、瀬戸内海に注いでいる大きな川が三本ある。東から吉井川、旭川、高梁川である。いずれも一級河川で、一番西を流れている高梁川の支流のまた支流に、件の谷間がある。ここを流れている小川の幅は、せいぜい十メートル程度だが、これでも一級河川の端くれであると威張っている。こんな小川で釣りをするにも、漁業協同組合の鑑札が要り、川原の石一つを頂戴するにも、国土交通省の許可が要る。

小さいといえども、ちゃんとした名前が付いている。布瀬川という。しばらく下ると成羽川に取り込まれ、さらに下っていくと、高梁川と合流する。

川の名前が後か先か、調べたことがないので解からないが、この地域を布瀬という。岡山県高梁市備中町布瀬である。上布瀬というのは、この上流地域である。ごんべえはここで生まれ育った。

ここから一キロほど遡ると、地元で磐窟といっている渓谷がある。渓谷の片側は、垂直に切り立った石灰岩の岸壁で出来ている。一枚や二枚ではない。その高さは百メートルもあり、磐窟洞(ダイヤモンドケイプ)という鍾乳洞が、その中の一枚に穴をあけている。ここから流れ出る水は、布瀬川の水の三分の一を占めている。そのおかげと、ごんべえは思うのであるが、この流域で出来る米は、美味しいと人は言う。

谷間であるから、水田も畑も広くはない。一反(十アール)にも満たない田圃が、大小取り混ぜて、上流から下流へと棚田よろしく連なっている。そんな中で、休耕田が、ここにあるぞと、高さ一メートルもあ

る雑草を生やしたり、猪に遊び場を提供している。これこそ病害虫の温床だ、と農業普及指導センターは皮肉を言うのであるが、そうはいっても、地主が居なくなったり、農作業が出来なくなったお年寄が多いので仕方がない。話には聞いていたが、こんなに田畑が荒れているとは、思ってもいなかった。過疎地の標本になっている。

ことの成り行きで、自然に何の抵抗もなく百姓みならいとなってしまった。どうしてかなと冬の星空を眺めながら考えた。「ネオンの瞬きよりも、天空の星の瞬き」の方が、ごんべえの心を捉えたようだ。どうも星が呼んだらしい。眼鏡を掛けている目にも、小豆や大豆をばら撒いたような星がよく見える。仰ぎ見ると、痛つと思えるような、いまにも落ちてきそうな星の数である。空気の透明度が違う。

昔とは数が少なくなったが、川筋には蛍が飛び、河鹿蛙が鳴き、川蟬・川鴉・黄鶺鴒・背黒鶺鴒などが水面をつっついていて。浅瀬には、きよんとした目つきあおぞまの青鷺が突っ立っている。

少し上流に行き、磐窟溪あたりまで行くと、山女が釣れるそうである。昔はいなかった。いつか誰かが放流したのであろう。ごんべえが釣るのは、ハエノコと云っているカワムツで、まだ山女には挑戦していない。子供の頃には、夏休みになると、毎日のように流し針で鰻を獲ったものだ。百姓の手ほどきをしてくれる隣人は、今でもよく釣れると云っている。

休耕の田畑に生える雑草にも、季節によって蔓延はびこる草の種類がある。春に草刈を済ませて、やれやれと思っていると、別の草が、それっ俺達の出番だと張り切る。これが夏、秋、初冬と続く。雑草のデパートであ

る。何種類あるか解からない。よく調べて図鑑でも作ろうか。地主のいなくなった休耕田の雑草を刈り、耕運して、牧草の種を植えた。雑草を押さえることと、あわよくば、緑肥や堆肥にしてやろうという魂胆である。来年の夏頃になってみないと、結果は解からない。

山に最も数の多い落葉樹は、春に芽吹いて、黄緑から深緑色へ、深緑から紅橙黄色へと変わり、そして落ち葉を作る。昔はこれを集めて堆肥にしていた。妻は、芽吹いてうす緑色になった頃が、最も好ましいと云っている。

蚯蚓や螻蛄は友達だ。田畑を耕す手伝いをしてくれる小型の耕運機である。ときどき狸と顔をあわせるが、どうも嫌われたらしい。立ち止まり、ちよつと振り向いて、すたすた行ってしまう。今どき狸汁などするものか。

ジョウビタキがやって来た。ずっと一年中住み着いている鳥もいれば、そうでないものもある。季節によって違うらしい。まだ観察を始めたばかりなので、どんな鳥がどうなのかわからない。以前から持っていた双眼鏡に加えて、友人からフィールドスコープを借りた。同じ種類の鳥でも、季節によって鳴き声が違うようである。

里芋さといもくらいと侮ったのが、失敗だった。殆ど収穫できなかった。水車（みずぐるまと読む）を作ろうと、材料を準備してきたが、しばらくの中断となった。里芋の毛羽立った皮をむく器具で、布瀬川の流れ水を使うのである。子供の頃にあったもので、これで下ごしらえをした里芋の味を、美味しいもの好きの口がよく覚

えている。

米や野菜果物、いろいろ作っても、美味しく食べなければ、何のために作ったのかわからない。自給を目指すには、料理の工夫が必須科目となる。退職前の二年間は一週間置きの会社で、単身であった。材料はスーパーで買い、自分で料理をして食べていた。こりや美味いと一人で悦に入っていた。退職の饞別にまな板を頂いたくらいだ。自己流が得意であるので、任せておくと作った料理は、妻や両親を驚かせている。喜んでもらっているとは限らないのだが、最近はいぶん上手くなった。今年、大豆をつくったので、味噌を作ろうと準備を進めている。メニューがまた増えそうだ。

そんなこんなで、あれやこれやを、文字に置き換えてみようと考えた。いざやり始めてみると、なかなか前に進まない。雨が降らないと、パソコンに向かえないのだ。あっちこっちに面白そうなのが一杯あって困る。トラクターを運転しなければならぬし、草刈もある。本も読みたいが、庭木の剪定も、家の掃除もある。稽古事も始めた。ハエノコも釣らなければならぬが、種蒔きもある。鳥の声を聞いて、それと、双眼鏡を覗かなければならない。田植えもあれば、稲刈りもある。生まれつきの野次馬根性が災いしている。山の中で退屈だ、などと言っている暇はない。

みならい百姓ごんべえ、これから先どこへいく。

二〇〇六年（平成十八）十二月十八日

四、「びつくり大根」

今年はみんなびつくりしたらしい。なにしろ大きい。ごんべえは初めて作るのだから、それがそれ程のものだとは思わなかった。ただ「大きくなるもんだなあ」程度であった。

あんまり大きいもんだから、測ってみた。巨大大根は、尻尾の先から葉っぱの先まで、一一三センチメートル、重さ四・五キログラムある。葉っぱを除くと、六六センチメートル、四・二キログラムである。太さは妻の足を越えている。何センチかは、言わない、いや言えない。

作ったというよりも、種を蒔いたら出来ちゃったという方が正しい。八五歳になる母もこんなに大きいのを見るのは初めてだそうだ。農協から買った「タキイ交配耐病総太り大根」の種を蒔いた。毎年母が蒔いていたのと同じものである。毎度スーパーマーケットで見かけるやつだ。それをそっくりそのまま大きくした形状である。

自家用に作ったので、全部で五〇本程度であるが、列を作って並んでいる様は壯観である。ラインダンスの足が、色白く畑で踊っている。五〇本全てが巨大と言う訳ではない。大きいことから、中、小とあり、数は少ないが小といえども、店で売っているのと同じ位である。巨大なのが一五本位ある。

恐る恐る大根おろしにして食べてみた。あんまり大きいもんだから、少々気味が悪かった。すっていると、随分水気が多い気がした。ちりめんじゃこを掛け、その上から醤油を少々落とした。スプーンで口に

入れた。さっぱりした味に甘みがあり、美味しいもんだ。これならいけると、やっと妻にすすめた。ごんべえが作ったものの毒味は、ごんべえの役目である。

これなら大丈夫と、友人達におすそ分けしようと考えた。玄関で新聞紙に包んだのを手渡した。「大根です」と言っただけのものだから、受け取った友人の奥様は、瞬間落としてしまった。思ったより随分重かったらしい。

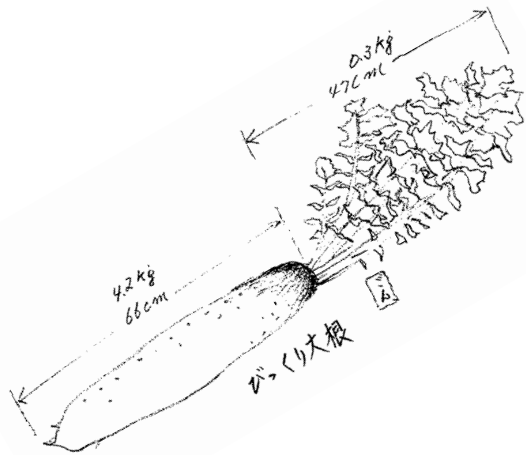
大きいには皆驚いたが、大根そのものの評判は、何でもなかった。気候のせいかな、今年は全国的に大根の大豊作で、産地ではトラクターで踏み潰しているそうである。どうせなら、巨大大根の品評会でもやったら、憂さ晴らしになったかもしれないのに。

特別に肥料を与えられたか、おまじないをした訳でもない。農薬も全く使っていない。ただ種を蒔いて、間引きをして、育つのを待っていただけである。ぐんぐん大きくなっていったのだ。

大根の種は、一グラムもない。こんなに軽いものを計る秤を持っていないので、分からないが、恐らく○・一グラムもないであろう。これが四・五キログラムにもなるんだから、すごいものだ。

だれがこんな生命の仕組みを作ったのか知らないが、造物主というか神というか、そんなものの存在を感じずにはおられない。人間がいくら偉そうに威張っていても、所詮食べ物しよせんを口に入れなければ生きてはいけない訳で、その食べ物は、詰まる所、植物の光合成に頼らなくてはならないのだから、人間もう少し謙虚に生きたいものだ。

このように考えていくと、ごんべえ、何時まで経っても見習いのままではいけないことになるが、それはそれでよしとしよう。



二〇〇六年（平成十八）十二月二十日